

講演記録：平成 26 年度松山大学図書館情報学講演会
「公共図書館と大学図書館の連携協力～大学図書館の地域貢献～」
（講師：東京外国語大学 茂出木理子氏）

はじめまして

皆様こんにちは。お昼ご飯食べたばかりで、眠い時間だというのは重々承知しておりますので、ビシバシいきます。

今日のテーマは「図書館の連携協力」ですが、その前提として、そもそも図書館は何のために存在して、何の役に立つのか、という大きな設問があります。その上で、そのために公共図書館と大学図書館、あるいは大学図書館とどこか、公共図書館とどこかが連携協力することは、意味をなすのか、なさないのか。これで意味をなさないという結論になってしまうと、大変さみしいのですが、このようなことを一緒に考えたいと思います。

アイスブレイクタイム ～図書館総合展のこと

まだ緊張されている方が多いようですので、本題の前に雑談のアイスブレイクタイムです。

早瀬先生からご紹介があった通り、先月（2014年11月）横浜で「図書館総合展」が3日間開催されました。図書館総合展は、今年で16回目、つまり16年間も続いている図書館業界の大きな催しです。総合展では、図書館に関係する企業や団体が出展されていて、新しい製品やサービスを紹介しています。その他に毎日10会場ぐらいでフォーラムが並行して行われます。

この総合展に関して、ある私立大学の司書課程の先生が「図書館総合展とは図書館界のコミケのようなものである」とおっしゃったと耳にし、私は「コミケじゃないもん！パリコレだもん！」と思い、例年以上に気合を入れて乗り込みました。

今回の総合展で特に面白いと思ったのは、学生のためのツアーが組まれていたことです。私のようにこの業界に慣れていると、いろんなブースに行き、知り合いの営業の方とかを見つけていろいろおしゃべりもできるのですが、初めてそういう場に行くと、戸惑うことも多いだろうということで、若手の図書館情報学の教員数名が手分けして、ブースを回るツアーをされていました。それは、学生さん達にとっても企業研究という意味合いもあったようですが、見ているとカルガモの行進みたいで可愛かったです。

私は、これまで5回、図書館総合展のフォーラムで登壇しています。「パリコレ」ですから、ちょっと尖ったことを発言しなきゃいけないと考えています。過去の発言を振り返りますと、まず2007年、テーマは情報リテラシー教育でしたが、「修羅場も乗り切れないで仕事したとは言えない」と。翌2008年、図書館活性化に関するフォーラムでは、「敵役もチーム力。使えるものは全て使え」と。さらに、2009年、10年後の大学図書館をテーマにしたフォーラムでは「あたしを拾うとお得です」と。2011年の日米大学図書館員スキルアップをテーマにしたフォーラムでは「プロのスキルとは組合せ。種類や数だけじゃナンセンス」と発言してきました。

そして今年は、図書館の連携協力というテーマでしたが、「孤立するな、しかし、つるむな」と申しました。

授業と研修の関係について

授業と社会人の研修は微妙に近くて、微妙に遠いと思っています。

遠いというのは、学部の授業であれば、知らないことを新しく知る、学んだ知識を定着させることが大事です。知識を定着させるためには教員も「アクティブ・ラーニング」、つまり講義をただ行うだけではダメで、学生自身が書いたり発表したり、学生同士で相談したり、そういう授業をしなければならないと言われていています。

一方、社会人の研修では、アンラーニング (unlearning) と言われていますが、経験とか知識とか自信とかこれまで蓄積してきたものを一旦捨てて学び直さないと、全然身に入っていくかない、ここが大きな違いではないかと思えます。

共通することは、本人がアクティブにならないといけないということです。「学びとる気持ち」です。これは北海道大学図書館の川村さんに教えてもらった言葉ですが、「学ばせてもらう」ではなく「学びとる」という言葉が非常にしっくり来ましたので、まずこれをご紹介します。

図書館とは？

本題に入っていきます。まず大きなテーマ「図書館とは？」です。

『坂の街のケーブルカーのメイベル』という絵本の中に非常に印象的なシーンがあります。サンフランシスコのケーブルカーのお話です。ケーブルカーは、効率も悪いし、お金もかかるのでやめちゃえという話が持ち上がった時、市民の中でケーブルカーを守ろうという運動が起こります。絵本の中にも「ケーブルカー好きの人たちが街の図書館で集会をひらきました。」とあります。何のために集まったかという、皆で意見を調整するためです。さらに、ケーブルカーを残すことに賛成する人も、反対する人も、それぞれが事実や数字を持ち出して、自分達の意見を出していく、ということが子どもの絵本に普通に書いてある、このことが私にとって新鮮な驚きでした。

もう一つ、2011年の5月に出された、『知の広場』という本をご紹介します。書いたのはアントネッラ・アンニョリ、イタリアの公共図書館の館長です。イタリアの図書館をどう改革していったかというお話で、非常におもしろい本でした。

その中に書かれている、「優れた運営の公共図書館は、地域のソーシャル・キャピタルを豊かにする場所」という表現に魅かれました。このソーシャル・キャピタルは、訳本でもソーシャル・キャピタルなので、なんとなくわかるような、わからないような言葉になっていますが、ざっくり言ってしまうと、地域の間人関係とか、協力関係とか、そういうものを豊かにする場、それが図書館であるという主張です。

そう言われてみると、さっきのケーブルカーを残すか残さないかという議論も、住民が図書館に集まって意見を集約したり、こういう数字で説得しようと相談したりするのは、まさにソーシャル・キャピタルを豊かにする場なのだと思います。

『知の広場』の中で、私が最も面白かったのは、新図書館への引っ越し当日の話です。何が行われたかという、古い図書館から新しい図書館まで、街の子ども達がお母さんと一緒になって、エッサエッサと本を運ぶというイベントが行われました。先頭には楽団が立って、音楽を鳴らしながら、その後を子ども達がお気に入りの本を持って行進をして新しい図書館まで入っていったそうです。こういう時、日本では偉い人が次から次へと挨拶

や演説をしますが、そういうものは一切なくて、子ども達と、それから市長さんがテープカットをただけで、あとはさっそく運んできた絵本を本棚に置いて、すぐに使えることを示したそうです。決して図書館が権威ではなく、みんなのためにあるということを非常にわかりやすく示された例だろうと感じました。

図書館連携に関する当たり前すぎる原則

これを言ってしまうと、今日の講義は終わってしまうのですが、図書館連携に関する当たり前の原則についてです。試験だったら、こう書いておけば、先生はバツができないという答えです。それは、「図書館が利用者から求められる資料を提供するためには、必ず図書館同士の連携を必要とする」です。

果たして本当でしょうか？

統計（『日本の図書館 統計と名簿 2013』）によると、日本の大学図書館で最も蔵書を持っているのは東京大学です。東京大学全体では927万冊の本があります。松山大学の蔵書の蔵書は114万冊もあり、大変優れた大学だと感じました。

一方、冒頭に早瀬先生からご紹介があった通り、どれだけ本を持っていようとも、利用者からそれ以外の本の要求があることは、大学図書館にとって日常茶飯事です。ではどうするか、他の図書館から借ります。これをILL（アイエルエル）サービスと私たちは呼んでいます。

先程の統計によりますと、日本でいちばん本を持っている東京大学でさえ年間4,300冊をよそから借りています。私の勤務している東京外国語大学でも610冊、松山大学では185冊借りています。この冊数が多い方がいいとか、少なければどうということでもありません。

さらに、各大学の教員・学生一人当たりの他の図書館からの借用冊数を出しますと、東京大学と東京外大はまったく同じ数字になりました。0.11冊です。松山大学は、かなり少なくても0.03冊です。松山大学には長い歴史があり、使うべき資料は基本的に揃っていて、他の図書館から借りる必要はないという分析の仕方もあるでしょう。あるいは、松山大学で所蔵している本以外のことまでを知りたいという学生が少ないという見方もあるでしょう。

なお、大学図書館全体では年間12万冊、公共図書館では年間200万冊というすさまじい数の本が図書館間で借りられています。

さて、今回のテーマは、「大学図書館の地域貢献」ですので、具体的な事例の話をしたと思うのですが、私の経験上、こういう話をすると、たいがいの人が寝始めます。つまりちょっと調べればわかる事は、聞いていてもあまり面白くないのです。

寝るぐらいなら、レジュメに参考資料は付けたので、自分で勉強して欲しいと思いますが、ただ、本当にもっと知りたいという時には、文献だけでは足りなくなります。大学図書館では、新しいことをやったら報告を雑誌に載せたりしますが、そういう時はドロドロした話は書けないので、きれいにまとめます。でも本当はどうだったの？と、インタビューに行くと、実はねという話しが山ほどあって、そちらのほうが面白いのです。

大学図書館の連携事業

面白くない話を長々としても仕方ないので、超特急で事実関係を概観します。



大学図書館の連携事業 あれこれを5分間で紹介！

- 連携協定を結ぶ、地域図書館団体(〇〇図書館協議会)
- OPACシステム連携、相互貸出、返却サービス、
- 研究室図書の見学・貸出
- 公共図書館から大学図書館への「一括貸出」
- 図書館会員制(年会費、寄付者)貸出サービス
- 共催イベント(展示会、講演会、上映会、ビブリオバトルetc.)
- 情報リテラシー講習、レファレンスサービス
- 地域資料の収集・保存・公開
- 医学系大学図書館での地域医療情報拠点
- 大学図書館内「子ども文庫」
- 図書館業務の連携
- 職員実地研修

まずは、連携協定を結ぶ。要するに、仲良くいろいろやってみようという約束をすることです。地域の図書館団体における協力、たとえば愛媛県図書館協議会のようなものです。

本の貸し借りをを行うために、お互いどういう本があるのかということがすぐわかるように、OPAC・蔵書のデータベースをいろいろなレベルで繋げます。当然、利用者がそれぞれの図書館から、直接本

を借りられるようにするし、返す時には、近隣の公共図書館で返すことができるような仕組みまで作るとかなり便利になります。貸出対象の資料という意味では、大学図書館側では、研究室にある図書も市民の方が利用できるように頑張ります。

それから、公共図書館側から大学図書館に対して一括貸出、つまり500冊ぐらいを3カ月位貸すということも行われています。ただし、これも報告書に書かれていましたが、最初の1、2年はいい感じで動かしても、3年目、4年目となると出すものがなくなってきます。公共図書館側はよく使われる本は出せない、大学側はそういう本こそ貸して欲しいというジレンマが出てくるようです。

大学図書館側で図書館会員を募る。近隣市民の方に対して、会費制の図書館友の会みたいなものを作って、特別会員として貸出サービスを行います。

公共図書館と大学での共催イベントとしては、講演会をやったり、企画展、展示会をやったり、それから映画の上映会、最近多いのはビブリオバトルの開催です。図書館の中でやるだけではなく、もっと街中へ出て行くというような試みが多いようです。つまり図書館まで足を運ばないような人に対して、もっと街中の人が集まるところでやることで、図書館の存在をアピールします。

大学図書館が学生向けにやっているデータベース講習会を公共図書館でも行うことや、地域資料の収集保存や電子化公開を、公共図書館と大学図書館でそれぞれの強みを活かして協同でやってらっしゃるところがあります。

医学系の大学図書館では、地域医療の情報拠点として、医学系の本がありますというだけでなく、健康に関する情報を発信したり、医療の講座を開いたり、健康相談コーナーを設けるなどのサービスを展開しています。また、教育学系大学の事例としては、大学図書館内に児童図書室を設けているケースもあります。

さらに進んで、図書館業務そのものの連携があります。その際、お互いの図書館のことをよく知らないと、連携もスタートできないということで、大学図書館の職員が公共図書館に1カ月ほど修行に行ったという事例も報告されています。

さて、司書課程の方、あるいはこれから図書館で働きたいと思っている方で、今の話の中でワクワクして自分も図書館員になったらこんなことやってみたいと思った事例がありますか？私は、あまりにも図書館の「ナカの人」になり過ぎてしまっているのか、正直あまり衝撃を感じませんでした。何かのサービスの延長線でこういうことはあるよなあとか、既存のサービスを他の利用者に広げたら当然そうなるなあとというように思ってしまう、新鮮な目線が欠けてきているようです。

ですが、こういう事例をご覧になって、図書館はもっといろいろなことができると前向きに思っただけでしたら、ご紹介した意味があります。

スライドには書かなかったのですが、私が今まで一番刺激を受けたのは、もう10年前のことですが、東北大学図書館が街の和菓子屋さんと提携して、江戸時代のお菓子を再現したというものです。東北大学図書館に江戸時代の資料がたくさんありますが、「江戸の食文化」という企画展に併せて、資料中に書かれていた江戸時代の和菓子を再現したいと思った図書館員が、街の和菓子屋さんに交渉して、最終的には商品として期間限定で販売されました。売れるかどうかを心配されていましたが、初日の朝には売り切れるほどの大好評でして、これは、なんかしてやられたという思いが今でもあります。

もう一つ、最近知った事例では、金沢大学図書館の「ECO 学習コンクール」です。金沢大学では全学的に ECO、環境に関する取組みを推進されていますが、その中で図書館が考えた独自のプロジェクトです。小中学生が対象で、環境をテーマにした自由研究を応募してもらい、学長賞などを贈るといった試みです。面白いのは、日産自動車の協賛を取り付けたり、金沢市の教育委員会の後援を取り付けたりという点です。大学図書館から外に出て「営業」を頑張っていて、開催にこぎつけたという点です。もちろん、実際携わった方に伺うと、大変なことはたくさんあったそうで、たとえば小中学校の校長先生の所に行って、協力してほしいと言うと、真っ先に言われるのは、「なぜ大学図書館がそんなことをするのか？」ということだったそうです。

大学図書館は開いてきているのか

大学図書館が統計データ上では「公開」の方向に向かっているということは、後ほどお話ししますが、現実にはどうでしょうか？

本学の附属図書館のホームページが一つの典型です。学外者の利用についての案内ですが、本学に限らず多くの大学図書館では、一言で言いますと「フラッと来るな」と言っています。もちろん各大学にはそれぞれの事情がありますが、あらかじめ申請してください、あらかじめ所蔵は調べてください、研究室の本だったら貸せないこともあるので承知してください、試験期はご遠慮ください、平日の9時から5時に来てください、など注文だらけです。

フラッと来て入れてもらえるのは、先程あげた事例ですと、年会費を払い友の会の会員になっているとか、卒業生の利用カードが発行されている場合などです。それ以外の方だと、「フラッと来るな」です。さすがにどこにも「フラッと来るな」とは書いてはいませんが、自戒を込めて、読めば読むほどそういうふうにはしか読めません。

公共図書館の貸出サービス

さて、貸出の話を公共図書館側から見るとどうでしょうか。

前川恒雄さんの『貸出し』（日本図書館協会発行）という本があります。1982年の発行なので32年前ですが、今読むと「あれっ？」と感じる記述もあります。例えば「日本の公共図書館が資料提供という素朴で単純な機能の実現に徹し、貸出しという原初的基本業務がサービスの中心となり、市民の強い支持と共感を得ることができ、…（後略）」、つまり資料提供に徹しなさい、もっと言うと、貸出さえしていればいいと読めなくもない記述です。

その他にも、この時代に問題にしていたのは「席貸し」と言われる現象です。32年前は家にクーラーがあまりなかった時代です。その点、図書館は空調もきいていて、机も広い、そういう状況で、勉強場所として中高生が来るということがよくありました。しかし、それは図書館の資料を使っていないので、よろしくない、図書館は本を中心にサービスすべきであるという論調です。

ただし現在では、大学図書館でも公共図書館でも、居場所としての図書館の重要性が言われるようになってきました。図書館は本を貸すことが機能であるという論調、たかだか32年前ですけれど、今読むと「えっ？」と思います。当時は最先端な考えだったはず。このように今いいと思うことが、30年たっていいと言われるかどうかはわかりません。

公共図書館のホームページには、年間でどれだけ税金として還元するサービスをしたかというような数字が出ていることがあります。私は、初めてこれを知りました。というのは大学図書館では、そのようなことを考えたこともなかったし、計算したこともなかったからです。

計算式としては、本の平均単価に貸出点数をかけます。そこから図書館を運営するのにかけた総経費を引き、市民総数で割ります。そうすると赤ちゃんからお年寄りまで含めて、市民一人当たり、図書館の貸出サービスでいくらの税金が還元できたという非常にわかりやすい数値になります。

貸出と行政効果!?



例えば、貸出数が多いので有名な浦安市では一人当たり3万円近いです。3万円返してもらえたと思うと、ちょっと嬉しいですね。私が住んでいる川崎市は約1万円ですが、実は私は川崎市の図書館からはあまり借りたことがないので、若干損したような気がしてきました。最近有名な武雄市は8,000円、松山は7,000円。おそらく松山市は図書館の規模に比べて人口が多いのだと思いま

す。

大学図書館で試算したらどうなるのかという興味に惹かれてやってみました。東京外大で学生一人当たり4,000円です。ところが大学図書館全体でやるとマイナス3万円の赤字です。ただ、大学図書館は、すぐ借りられるような本だけでは、たとえば電子ジャーナルとかデータベースなどにもお金を使っているので、本の貸出数で費用効果を考えるこ

とは妥当ではありませんが、自分で調べてみて、公共図書館と大学図書館のことは、わかっている気でいたのが、違うということを改めて肌身で感じました。

さて、公共図書館にとって本の貸出は、税金還元という表現も使われる市民サービスですが、一方作家や出版社にとっては「本が売れなくなる」という逆な問題になります。そういう論争は以前からありましたが、表に出たのは2001年のことです。作家の楡周平さんの「図書館栄えて物書き減ぶ」という文章が雑誌『新潮』に掲載されました。翌年、日本文藝家協会が文部科学省と文化庁に対して「公共貸与権実現の導入」の要望書を提出しました。そして、2003年には、日本図書館協会と日本出版協会が合同で公共図書館の購入と貸出に関する調査を実施しました。この調査は500館に対して行われ、回収率85%です。

翌年、報告書（『公立図書館貸出実態調査 2003 報告書』）を公表されていますが、それによると、1館でベストセラーを50冊も100冊も所蔵しているようなところはなく、平均しても2冊以下であったという結果でした。

これでいったん収まったかなと思いましたが、2011年に作家の樋口毅宏さんがご自身の小説の巻末に、「公共図書館で貸出がされると新刊の売れ行きに影響があるので、半年間待ってくれ」という内容の文章を載せられました。このように公共図書館が貸出こそが市民サービスであるという論調だと、それで不利益を被ると主張する団体があるのも事実です。

再び、図書館ってなんだろう？

利用者に本を貸すことが図書館サービスの王道だとしたら、それで大学図書館と公共図書館が相互に本を貸出し合って、市民サービスに徹すれば、すばらしいということになりますが、本当にそれだけでいいのだろうかという気になってきませんか？

『図書館の誕生』という本の中に出てくる言葉を紹介します。日本語訳では「コンサルテーションのために使いやすくしてある、つまり参照するのに使いやすくしてある作品集。これがまさに図書館。」と表現されています。

使いやすくしてあるとはどういうことか、図書館現場の感覚で言いますと、本をまず一カ所に集めて置く。集めただけではダメなので、分類して内容的に近い本を近くに揃えておくなど並べ方を工夫する。そして欲しい時にすぐ取り出せるように、見出しをつけておく。本に関しては、最低限、それぐらひはやらないと図書館とは呼べないかもしれません。

スライド（#28）でお見せしているのは、中世の「鎖でつながれた本」ですが、これは図書館なのでしょうか？絶対その場所からなくならないという意味でいつでも使える状態にあるといえ、図書館の最たるものかもしれません。

このスライド（#29）は、最近の「自動化書庫」です。人が取りに行くのではなく、機械が取りにいった窓口まで運んでくれます。借りたい時に呼べば出てくるという意味では、確かに図書館かもしれません。

このスライド（#30）は、アメリカで紹介されていた「Little Free Library」。自宅の前に小さな本箱を置いて、地域住民がお互いに貸し借りをします。これは図書館でしょうか？本はきれいに並んでいるし、地域住民が幸せになるからこれも図書館のような気がし

ます。

このスライド (#31) は、千葉県船橋市駅構内にある「ふなばし駅前図書館」です。本が並んでいますが無料で借りられます。このような小さいスポット的な図書館が市内のあちこちに置かれています。

スライド (#32) には「走れ！移動図書館」とありますが、これは、シャンティ国際ボランティア会が東北の大震災の直後から始められたプロジェクトです。災害時には、本よりもまずは食べて寝ることのほうが大事だと誰もが思います。しかし、こういう時こそ本は力を持つという信念のもとに、トラックに本を積んで、被災地を回られました。

さて、本がないと図書館ではないのでしょうか？このスライド (#33) は、2013 年にテキサス州にできたまったく本を置かないペーパーレスの公共図書館です。ホームページの紹介によりますと、900 台ぐらいの電子書籍が読めるタブレット端末や館内のパソコンでネット上の文献が読め、さらに電子書籍を借りて自宅で読めるそうです。

Gilpin County Public Library の看板
<http://www.gilpinlibrary.org/>



先程ご紹介した『知の広場』の著者が日本で講演された時に、あるアメリカの図書館の看板 (#34) を紹介されました。図書館のサービスメニューで、無料のコーヒー、インターネット、公証人 (NOTARY)、電話、笑顔、トイレ そして「アイディア」。特に、笑顔とアイディアが入っていることを高く評価されていました。

次にご紹介するのは、TED の講演 (#35) からです。ジャック・アンドレイカという高校生が画期的なすい臓がんの検査方法を開発したという話です。さすがは今どきの高校生で、何か調べたいことがあった時はインターネットを駆使するようです。最終的に彼がすい臓がんの検査で新しい方法を見つけるためにキーとなった学術記事は、「Public Library of Science」と呼ばれているインターネット上の無料で使える科学雑誌に掲載されたものでした。彼の中では一度もリアル図書館に行くという発想はなかったようです。徹底してインターネットを駆使し、そして正解にたどりついたということでした。

さて、「図書館ってなんだろう？」に戻りましょう。長尾真先生が（元国会図書館長、元京都大学総長・図書館長）、理想の電子図書館では、ただ知識とか情報が積み重なって記憶されているのではなく、今までの知識の間で新しくモノが何か作り出されていく、ピピピッと新しいモノが生まれてくるような感覚だと、おっしゃっています。

本日は最初に、学生時代は知識を積み重ねることも必須だけど、大人になってくると、持っている知識を組み替えていかなければいけないという話をしました。そういう知識を組み替えていくという過程の中で、電子的な形態でも紙の形態でも、情報、文献、図書というものが関与しているはずですが、したがって、「図書館ってなんだろう？」「そのための連携って？」と考えた時に、「図書館は、単に本が集まっている場所です」と考えると、非常に発想が止まってしまう、あるいは、やれることを狭く限定するという危険があるように思います。

公共図書館のビジネス支援

最近の公共図書館のトピックスについて、大学図書館員の間から見たら、どう見えるかという観点からお話します。国立国会図書館がまとめた『地域活性化志向の公共図書館における調査研究』（2014年3月刊行）を読んでみました。

ここでは大きく4つ取り上げられていました。それぞれ完成形というよりは、まだやり始めたばかりだという状態の調査報告であったことが面白かったです。

「岩手県の農業支援」。農業が盛んな地域なので、なんとなく何をやるかがイメージしやすい内容です。次に、「宮城県東松島市の東日本大震災を語り継ぐ」。これも記録をアーカイブする仕事というのは、図書館として大事なことなのでイメージしやすかったです。「元気はいたつ便」。これはタイトルからだけでは、いったい何を配達するのかイメージがわかりませんでした。そして最後の「東近江市の「リトルプレス」」は地域紙というのでしょうか、コミュニケーション紙というのでしょうか、そういう小冊子を図書館が作ろうという活動で、これもなんとなくイメージできました。

さて、最もわからなかった「元気はいたつ便」ですが、私の周りにはいる大学図書館職員にも図書館の活動としてイメージできるかと聞いてみました。相手は高齢者施設だというヒントを与えると、全員が「元気はいたつ便」とは、対象施設に対して図書の団体貸出をすることではないでしょうか、と答えました。確かに、本を届けることも「元気はいたつ便」サービスの一つです。ただ、「元気はいたつ便」では、本の貸出だけではなく、図書館員が高齢者の施設に行き、そこでグループ回想法という、昔の道具とか昔の写真とかを手にとってもらって、昔語りをするのを聞いたり、一緒に歌を歌ったり踊ったりということもされています。そのようなことまで図書館員がやるか！というのが、私にとって一番の驚きでした。

他にも『調査研究』に書かれていることで面白いと思ったのは、最初の農業支援で、図書館の中に農業支援コーナーを作って、専門書を置いたり、あるいは農家の方にデータベースの使い方を教えたりというようなサービスですが、実務担当者が振り返りとして述べられている文章が興味深かったです。このようなことが書かれています。

最初は、図書館がどのようなことをすれば図書館としての強みや役割を果たしつつ、相手の役に立てるのかということばかり考えていた。しかしいつも、連携する相手はいかに図書館にメリットを生むかを考えてくれた。

そのことを連携の仕事、つまり農業支援という仕事に手を広げた時に気づいたとおっしゃっています。

さらに、東近江市の「リトルプレス」についてですが、調査をされた第三者の気づきとして、「東近江市立図書館の実践の中で最も驚くべきことは、行政部局との連携や、新規事業の立ち上げ、新たなサービスの企画といったことが、『ふつう』、『あたりまえ』のこととされている点である」と書かれています。

逆に言いますと、行政部局との連携、あるいは図書館で新しいサービスをやるということが当たり前ではない、特別に大変なことだと意識している人が多いからこそ、このことを最も驚くべき点として挙げたのだと感じました。

もう一つ、レポートの中で注目したのは「東近江市立図書館で指摘しておきたい点は、

市民や行政部局の職員に図書館の活動が理解され、評価されていることである。『東近江の図書館は、単に本をレンタルする場所ではなく、自ら情報を発信するところである』との認識が以前からあった」という記述です。

言葉で「連携が大切だ」、「今後は地域連携だ」と言うのは簡単ですが、実際にはまず関係者の意識というレベルでも高いハードルがあることが、レポートからも読み取れます。

誰でもそうですが、昨日と同じことをやっているのが一番楽です。全然違うことをやらなければならないというのは非常に苦しいし、きついし、やりたくないものです。

最初に申し上げたアンラーニングという学び直しも非常に厳しいし、そう簡単にいかないと説明しましたが、同じように大学連携とか地域貢献とかいうキーワードだけでは簡単に語れないところがあると思います。

今日の私の講演も「世間ではこういう事例があります。図書館連携は大事です。」と60分でまとめることは簡単ですが、それでは表層的過ぎて、逆に頑張っている方に対して失礼な気がします。

冒頭に早瀬先生が私のことをお茶の水女子大学で大学図書館改革に取り組み、実績を上げられたと、ご紹介をいただいたのですが、そのことで思い出したことがあります。最初の最初に何をやったかということです。図書館長と二人で話をしていたとき、館長が学内にもっと図書館のサポーターを増やしましょうとおっしゃったのです。

つまり先程の事例のように行政の事務の方が図書館を非常に理解してくれている状況であれば、物事は進み易いのですが、そうではない状況で、図書館があれこれやっても、大体つぶされるし、うまくいかない。だから非常に時間がかかるけど、まずは大学の事務、教員、学生に図書館のことをもっと理解してもらいましょう、そこから始めましょうというのが第一歩だったことを思い出しました。

ここで、リフレクティブタイムです。まとめますと、公共図書館では、閲覧、貸出中心の時代の次という段階に入っているのでしょうか。大学図書館もまた、学習・教育の支援に向かっているのは確かです。いずれにしろ、これまで図書館の範疇ではないと思われたところに大胆に踏み込み始めた先端的事例が出てきています。ただし、先端的事例ですので、もしかしたらポシヤるかもしれない。あるいはある地域でうまくいったものが、こっちはうまくいかないということは、十分あり得ます。

連携のための3つのポイント

あくまで私論ですが、連携には3つのポイントがあると考えています。

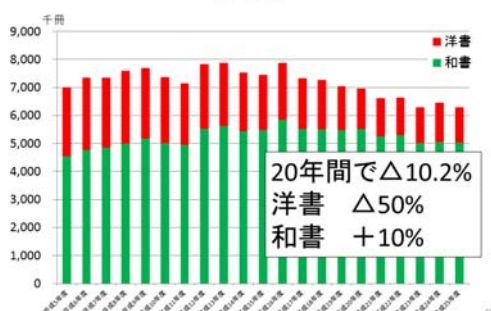
- ① 実態を共有すること
 - ② 相手をリスペクトすること
 - ③ 簡単に分かった気にならない
- です。

実態を共有するとは、数字の上のことだけではなく、我が身のこととしてわかるために、非常にフラットで柔軟な姿勢で相手のことを受け入れなければいけない、勝手に思い

込んで、批判しないということです。相手をリスペクトするとは、先程の事例にもありましたが、相手がいかに有利になるかを考えてあげる、自分の強みより相手を活かしてあげてことを考えるというものです。そして、簡単に分かった気にならないとは、一言で言うと、批判的思考力を身に付けるということに等しいように思います。これらの姿勢は、何度も申し上げた「アンラーニング」にもつながるように思います。

数字で見る大学図書館

大学図書館での図書を受入冊数 H5～H25
＜全体＞



数字で見るという話をしましたので、ここで大学図書館の統計データを紹介します。

過去 20 年間で毎年どれぐらいの本を入れているかという統計ですが、20 年間で 10% 減です。和書は 10% 増なのに対して、洋書は 50% 減です。このデータには、寄贈による受入も含まれますので、購入だけで見ると、全体では、15% 減です。大学の数自体は、20 年間で約 1.5 倍になっています

ので、1 大学あたりの平均では、41% もの減少です。1 大学平均だと、総経費、資料費、運営費とも、およそ 30 数% の減少で、特に図書費は 60% もの減少となっています。

地域連携に関連して、大学図書館の開放についての数値を見てみましょう。現在、8 割の大学図書館は一般学外者の利用が可能で、4 割は貸出も可能になっています。学外者への貸出は、20 年間で約 5 倍です。また、大学図書館外への貸出、つまり公共図書館とか専門図書館に対しての貸出数も約 5 倍となっています。このように数字だけで見ますと、大学図書館はすでに十分に公開されていて、地域貢献あるいは連携も進んでいるように見えます。

公共図書館の 20 年

公共図書館の 20 年間で見てみましょう。図書館の数が 1.5 倍、蔵書 2 倍、貸出冊数 2 倍となっており、右肩上がりです。登録者数は 2.4 倍。来館者数、これはここ数年の数字しかありませんが、それでも 1.3 倍。ただし細かく言いますと、一人当たりの貸出冊数は下がっていますし、来館者一人当たりの貸出数も下がっています。これは、本を借りるためだけに来館しない人が増えた、とりあえず図書館利用カードは作ったけど実際は利用していない人が多い、などの解釈ができますが、先程も言った通り、数字だけでそれが実態だと思いつむのは危険です。

蔵書回転率（1 冊の本が何回借りられているか）で大学と公共の数字を比べますと、松山市立図書館では 2.55 回で非常によく回転しています。日野市立図書館（2.28 回）や浦安市立図書館（1.88 回）より上でした。なお、公共図書館全体では 1.76 回です。

他にも面白い調査があります。2006 年に刊行されたものを対象に、国立国会図書館と全国の公共図書館と大学図書館で、どれぐらいの本をカバーできているかという調査です。

分析結果としては、国立国会図書館が 9 割弱のカバー率、これは国会図書館の方がお

っしやっていた納本率の数字とだいたい合っています。公共図書館も全国を総合すると 8 割の本を持っています。それに比べて大学図書館というのは、取捨選択が厳しいので、カバー率は 6 割程度でした。ただ「専門」カテゴリの書籍については、国会図書館、公共図書館、大学図書館ともカバー率が 8 割ということで、一般には売れづらい本も図書館が買い支えているのではないかという分析でした。

最後に、図書館ってなんだろう？

いよいよ最後です。三度、「図書館ってなんだろう？」「連携ってなんだろう？」です。先日講演を聞いたアメリカ図書館協会元会長のバーバラさんが、図書館について、「リアルな世界との橋渡し」ということを強調されていました。そして、あくまで主役は市民である。図書館が何をしたいかではなく、その地域のコミュニティが何をしたいかが重要であると繰り返し述べられていました。

彼女がアメリカ図書館協会の会長であった時に作られた「宣言」の日本語訳が、最近発表されました。『暮らしは図書館で豊かになる：図書館権利宣言』（原文は“Libraries Change Lives : Declaration for the Right to Libraries”）という大宣言です。インターネットからダウンロードできますので、ぜひお目通しいただきたいと思います。本を貸すだけが図書館ではないということを、はっきり宣言しています。

また、ピッツバーグ・カーネギー図書館の名誉館長のメアリーさんは、新しい図書館が新しくやっていくためには図書館員として何が必要かということを発表されています。図書館員気質とは相当離れますが、まずデータで客観的に把握できること。つまり数字に強くなければいけない。次に数字だけに頼らないでニーズやウォンツを肌身で感じること。数字で現れないことは、その場に行って知る努力をすること。それから、新しいツールを整備し、他の機関に協力し、誰でもわかるように計画書をまとめあげ、さらにいろいろ言われても、めげずに熱心に頑張り、最終的にチャッチャと成果を出す、新しい図書館員像をこのように説明されています。

確かにこれかの姿勢や資質は、大学図書館であれ、公共図書館であれ、連携、あるいは地域に根ざした活動をしていくという時に欠かせないことです。本に向かい合うということも大事ですが、連携事業は、それだけではできない仕事だと思います。

私は、現在、あるいはこれまでのサービスの延長線で連携サービスを論じるのはナンセンスであると考えます。それでは連携が行き詰まると思います。では、本当に必要なことは何かということは、本ではなく人に向かい合わないに出てこないのではないかと思います。

とは言え、図書館の本業、資料のコレクションを構築してきたというのは、大事な財産です。それを捨てて何かに走れということではありません。が、それを使って何をするのかということを考えるということは、同時に図書館、あるいは図書館員の「アンラーニング」になるわけです。つまりこれまでの蓄積を大事にしつつ、自ら考えるということです。

これは今始まった話ではなく、ランガナータンが図書館は成長する有機体だと言っている以上、当然と言えば当然の帰結ではないかと考えます。

ということで、最後5分、何かこの場でぜひ言っておきたい、質問しておきたい、なんでもお受けします。

質疑応答

○司会 5分という短い時間ですが、質問なりコメントなりございましたら、お願いします。

○会場 公共図書館と大学図書館の連携協力ということだったのですが、モデルになってもいいような、うまくいっているような事例というものが、私、鳥取県はすぐ思いつくんですけれど、何か参考になっているような、ここはぜひ話を聞いたほうがいいのかというような、そういったのがあれば、1、2例教えていただけないでしょうか。

○茂出木 実は私もそれが知りたくて、今日ここへ来たのです。それなりに多くの文献を調べたり、インターネットで検索したりしたのですが、これぞというのが見当たらないのです。資料になる形では発表していないということかもしれません。

先程おっしゃった鳥取県は、一つあるのですが、かろうじて引っかかったのが、金沢大学です。私の調べ方が下手なのかもしれませんが、どうやっても見つかりません。

○司会 先程、茂出木さんからも言われたように、連携協力というのは、通常の努力よりも、さらに努力が必要です。だからなんか最初は連携協力をやろうということで力が集まっても、維持するというのが、なかなか難しい。

前に私がいた名古屋の例で言いますと、東海地区図書館協議会というのがあります。ご存じですか。静岡、愛知、三重、それから岐阜の4県の大学図書館と公共図書館が図書館の貸し借りとかレファレンスとか、そういうことについて枠組みを作ってやっているという例があります。他にここにおられる方で、何か事例等ご存じであれば、発表していただきたいと思います。

○司会 公共図書館の方も来られていると思いますが、もし何かご存じの事例があったら、発表していただければと思いますが、いかがでしょうか。

○会場 遅れてまいりました。徳島県の鳴門市立図書館の高田と申します。いい事例として、大きなものではないのですが、日々の中で鳴門教育大学と協力しています。徳島大学にもお世話になっております。

鳴門教育大学と鳴門市立図書館は協定を結びまして毎週連絡行き来しています。まず貸出については、鳴門教育大学には子どもの部屋があり、絵本も借りられます。市民も利用できますので、そこで借りた本は、鳴門市立図書館に返却可能です。鳴門市立図書館から鳴教大に、またその逆もあります。鳴教大の学生が、公共図書館に借りに来ますが、なかなか返してくれないので、大学の図書館に返すと、こちらに届きますよというような形で連携しています。

公共図書館にない専門的な本は、リクエストというかたちで、大学図書館から借ります。徳島大学には医学部がありますので、鳴門の看護学校の学生や専門職の方が借ります。先週も徳島大学の総合から借りました。

徳島市立図書館が今、徳島大学と共同でビブリオバトルや大学の先生が選んだ本を、公共図書館でコーナーを作って展示したりしています。それと徳島大学に移動図書館が入って、一般の本も見てもらうというようなことが始まっています。いろいろなところで連

携はしているとは思いますが、大きな成果としてはまだ上がっていないところかと思えます。公共図書館は、大学の図書館に専門書で支えていただけていますが、今度は人のネットワークというのが大事であると思っているところです。

○司会 どうもありがとうございました。

この後、さらにいろいろ講師の方とお話をしたいということもあるかと思えますので、それは意見交換会のほうで、やらせていただきます。場所は5階の、階段のすぐ左手の部屋です。ささやかですけれども飲み物と、それからお菓子がありますので、ぜひ参加していただきたいと思えます。

それでは最後に、今日いろいろ面白い話をしていただいた茂出木さんに拍手でもって感謝をして、それでお開きということにしたいと思います。

(拍手)

なお、当日のスライドは、<http://www.slideshare.net/ModekiRiko/20141216-42816005> 及び <http://mu-libcourse.jp/htdocs/pdf/lectureslides2612.pdf> で公開している。